

平成25年度第3回 函館市観光基本計画策定検討委員会 会議録

■ 開催概要

開催日時：平成25年7月18日（木） 10:00～12:00

開催場所：函館市消防本部2階 会議室

出席委員：木村委員，市根井委員，蝦名委員，遠藤委員，奥平委員，田中委員，
中野委員，西村委員，藤森委員

欠席委員：和泉委員，折谷委員，黒川委員，國分委員，小林委員，全委員

函館市：観光コンベンション部長，観光コンベンション部次長，観光振興課長

日本観光振興協会：全研究員

■ 次第

- 1 開 会
- 2 討 議
- 3 委員長総括
- 4 そ の 他
- 5 閉 会

■ 討 議

（木村委員長）

前回の委員会の議論を受けて，事務局と一緒に本日の議題に関する資料を作成した。

さっそく一点目の基本理念に関する議題に入る。

前回，かなりの数の基本理念案をお示ししたが，今回はその中から4つに絞り，これらをたたき台に議論していきたい。

※基本理念案は以下のとおり。

- ①新たな交流の時代へ 真の国際観光都市 函館
- ②人・まち・文化がつなぐ 新・国際観光都市 函館
- ③日本の宝石箱・観光都市・函館
- ④多文化交わる極上のまち・函館へ
→「極上」の代わりに，「憧れ」，「感動」，「迎賓」，「心に残る」など

（中野委員）

確認だが，この基本理念は観光プロモーション用のキャッチコピーのようなものではなく，市民に向けて発信するものというイメージでよいか。

(木村委員長)

そのように認識している。それを基盤に、観光プロモーション用のものが派生していくことになる。

(藤森委員)

今後10年間で函館市にとって一番影響が大きいのは、新幹線が来るということ。

東南アジアからの観光客が多く来ていることと、新幹線時代がキーワードになっていることから、①と②を合わせた形がいいのではないか。

(遠藤委員)

新幹線だけではなく、他の交通アクセスも考えるべき。例えば、10年後には釧路まで高速道路が延伸されているはずなので、車での道内の人の交流も増えてくる。道央道が十勝と繋がり、利便性が良くなったことで、十勝方面からの道央・道南への人の流れが大きく増えたと思う。トップシーズン以外は、道内の観光客の動きも大きなポイントになる。

(木村委員長)

2015年以降の話になると、「高速交通網時代」や「交通ネットワークの整備」などのキーワードが入ってくる。新幹線のほか、空路や道路などの公共交通網全てを包括した整備が今後進んでいくと思われる。

(田中委員)

対市民向けのアピールという点に非常に共感している。この基本理念は、国際観光都市に住む市民として何を心がけていくのか、自分たちの居住まいを正す指針のようなものになる。

そういう意味で、③の「宝石箱」という言葉には共感できる部分がある。宝石箱の中にはゴミがあったり、宝石に汚れや曇りがあったりしてはいけない。常にクリーニングが必要。そういう視点で問題点を発見していくことが、自らを正していくことに繋がっていく。

そのためには、「宝石」とは何かをはっきりさせないといけない。「人・まち・文化」というのはすごく良い言葉だと思う。宝石とは、人であり、まちであり、文化であり、函館らしい温かい人情などはまさに宝石である。そのように、我々の発想が豊かになっていくようなものもいい。「ひと・まち・文化」と「宝石箱」というキーワードは、新幹線開業などの新しい局面に対応するのとは別に、ずっと長く温めていくようなキーワードだと思っている。

(木村委員長)

人とまちと文化の宝石箱の中に居続けられているという感性は、ぜひ市民にも持っていただきたい。

(市根井委員)

平成元年に、函館市が国際観光都市宣言を打ち出したが、実態に合っていないと感じていた。市民に向けたものという意味では、①の「真の国際観光都市」というのは、すごく重い言葉。

「宝石箱」は素晴らしい言葉だと思う。これから新しい交流を目指していくうえで、「新たな交流の時代」や「宝石箱」といった言葉は使いたい。

(蝦名委員)

④の「多文化交わる極上のまち・函館へ」の「極上」という部分を「憧れ」に代え、さらにそこに「身近さ」のイメージを加えた理念案がいい。

「憧れ」というのは函館ブランドの確立でもある。重厚感のある歴史的な観光資源を持つ函館には、札幌や青森などの都市観光では経験できない魅力がある。

「極上」「迎賓」という言葉だと、まちの人達の温かさや港町の素朴さ、そこでの暮らしぶりなどが見えなくなってしまう。人がそこにいるから「宝石箱」として成り立つのであって、それこそが自慢できるまちづくりにつながっていく。

「憧れ」と「身近さ」が共存している稀有な街というのが、函館ブランドの一つだと思う。

(西村委員)

市民向けのメッセージということで、市民の中に「観光客を感動させよう」という動きが出てくるようなものにしたい。市民のちょっとした言葉掛けなどでも、観光客に感動を与えることはできる。

(木村委員長)

基本理念のフレーズ自体に色々と盛り込むと長くなってしまうので、大事なことは説明の部分にポイントとして表現してもよい。

(奥平委員)

現計画には、基本方針に「まちづくり」が明記されているが、次期計画ではその考えをどのように捉えていくのか。函館市の総合計画に既に「まちづくり」が入っているのに、観光基本計画でも「まちづくり」を打ち出す必要があるのか。それを考えると、あえて「まちづくり」という言葉を使う必要はないと感じている。

(木村委員長)

次期計画は、これまでの観光基本計画からのステップアップということで議論してきているので、既に「まちづくり」という考え方が内包されているという認識でいいのではないか。

(田中委員)

まちづくりというのは、経済、政治、都市デザインなど総合的なもので、もっと上位の概念になる。観光の場合、経済状況などの影響を大きく受けるので、まちづくりとはこうあるべきだ、というのを出さない方が柔軟な対応ができる。

ただ、そうした意識を常に持つべきという考え方には賛成だ。

(奥平委員)

まちづくりに引っ張られて観光があるのではなく、観光でまちづくりを牽引していこうというのが、本当の意味での観光基本計画だと思う。

(木村委員長)

観光コンベンション部長から何かご意見はあるか。

(観光コンベンション部長)

基本理念については、すでにある状況を断言するものではなく、「これからこういう街にしていきたい」という思いを込めて、「～へ」という表現がよいと思っている。

(木村委員長)

国際観光都市という表現についてだが、これは市民に対してだけでなく、施策を具体化していく函館市に対してのメッセージでもあるので、実現していくのはかなりの困難を伴うが、ぜひ文言に入れたい。

(中野委員)

「人・まち・文化の宝石箱 新・国際観光都市 函館へ」はどうだろうか。「宝石箱」には豊富な観光資源という意味もある。

(木村委員長)

「人・まち・文化の宝石箱」というのは、キーワードとして収まりが良い。異論がなければ、これを最終案としたいがいかがか。

(出席委員からの異議なく了承)

それでは、基本理念案は、「人・まち・文化の宝石箱 新・国際観光都市 函館へ」としたい。

(中野委員)

基本理念に大きく関係する部分として、施策の基本方針に、「国際化の促進」、「交流・賑わいの促進」、「おもてなし・満足度の向上」、「連携と差別化」といった四つのキーワードが掲げられているが、選択と集中という観点から、優先順位を決めるべき。

この中では、やはり「おもてなし」が一番重要だと思う。函館は成熟した観光都市であり、市民意識のレベルを上げていくということを考えるべき。

(木村委員長)

四つを三つに整理しても構わないと思う。「おもてなし」を一つ目に、「国際化の促進」を二つ目に、「交流・賑わいの促進」と「連携と差別化」の文言を整理して三つ目に集約してもよい。

(田中委員)

そもそも、これらを選んだ基準は、モニタリングできるから、ということだと思う。何をバロメーターにしていくべきか、ということを念頭に考えるべきで、順位付けの前に議論してはどうか。

「国際化の促進」では海外からの観光客による経済効果、「交流・賑わいの促進」は人の流れ、「おもてなし・満足度の向上」は観光客がどれだけ満足して帰っていったか、「連携と差別化」はもう一度行ってみたいと思うような、観光地を選ぶ際に反映される本質的な満足度やオリジナリティ。

そのように、具体的なバロメーターがイメージ出来ればよい。

(木村委員長)

一定の重み付けをすべき、という点では皆さん合意できると思う。施策展開については、後ほど改めて議論することとしたい。

次に、目標設定の議論に移る。

資料の内容について、事務局から説明を求める。

(資料について事務局より説明)

基本方針とリンクさせて議論しなければならない。

まず、一つ目の滞在日数の拡大についてはどうか。

(遠藤委員)

北海道の目標をベースにして考えているが、北海道は道内周遊が主流で、一地域での滞在型はあまり考慮していないのではないかと。函館の目標とするには事情が違ってくるのではないかと。

(木村委員長)

道や国の目標と、函館の目標の考え方は違うと考えられる。このことについて、事務局からコメントはあるか。

(事務局)

道や国の目標はあくまで参考に過ぎない。これを函館の目標にどう反映させるか、という視点で議論していただきたい。

(木村委員長)

滞在日数の拡大については目標として置くこととするが、具体的な数値については事務局とも相談し、再度検討したい。

また、観光入込客数500万人という目標数値についてはどうか。

(奥平委員)

現計画では650万人という目標値を置いている。また、過去には540万人を達成している。これらよりも低い500万人を目標値に置くのはどうか。

(遠藤委員)

当時、繁忙期以外は格安募集ツアーが全盛期であった。航空会社の大型機（500座席以上のジャンボジェット等）が主流で、座席を埋めるため、採算度外視の格安料金を団体ツアー向けに提供した大量集客・送客の時代であった。

新幹線開業で、発地先によっては、観光客も飛行機から新幹線にシフトすると思われるが、JRでは、かつての航空会社同様の対応はありえない。また、道内の大規模ホテルも、ここ数年の団体旅行客の減少により再編が進み、客室数の減少が進んでおり、受け入れるキャパシティ自体が、当時よりかなり減少している。

(中野委員)

昔は観光パンフレットでしか情報を得られず、旅行会社も札幌・小樽・函館くらいしか売っていなかった。今は誰でも自分で簡単に色々な場所の情報を得ることができ、函館の優位性が失われている中で、500万人達成は難しい。新幹線効果で500万人を達成する可能性はあるかもしれないが、その後は落ち込むと思われる、平成35年まで上

がり続けるというのは現実的ではない。

(木村委員長)

皆さんが、500万人の達成が難しいという感覚をお持ちだということが分かった。入込客数については、目標としてではなく、前提として置かせていただき、他のパラメーターを絡めて目標値とするということで整理したい。

3つ目の満足度の向上であるが、質的な目標として一番分かりやすいものとする。

(田中委員)

満足度の高い人ほど宿泊日数や消費額も多いと感覚的には思われるが、目標として掲げた内容が現実と合っているのか、検証する必要がある。

(遠藤委員)

満足度と宿泊数や消費額のリンクを調査するのは難しい。パック旅行の場合、旅行代金の内訳(交通機関、宿泊、飲食、保険、手数料など)は、旅行者自身には分からない。

(奥平委員)

宿泊施設において、消費額の詳細なアンケートを聴取してはどうか。こうした取り組みは今までやっていない。大変だとは思いますが、定量的な情報がない中で議論しても意味がないのではないかと。

(木村委員長)

そうした話は以前からあり、今回、簡易版ではあるが産業連関表を作成し、全体像を捉えようとしている。そうした意思是、計画に盛り込むということを確認する。

最後に、施策展開の議論に移る。

基本方針から具体的な施策まで、これまでに出てきた話をまとめたものであるが、整理しきれていない部分もある。まずは、先ほど少し話が出た基本方針についてご意見をいただきたい。

(田中委員)

「連携と差別化」は、他の三つとは次元が異なっている。他の三つがリアリスティックもしくは表層的であるのに対し、これだけは深層的もしくは根幹的である。量的に把握しづらい。あえて言うなら、また来たいと思うような理由というべきもの。

(木村委員長)

四つの基本方針が示されてはいるが、今ひとつ整理しきれていない。事務局と改めて整理させていただきたい。

(中野委員)

連携という言葉がイメージしづらい。何を連携するのか。また、差別化とはブランド戦略のことか。

(奥平委員)

以前議論した際には、規模の経済性を追求し、青森との地域間連携、広域連携という話が出ていた。

(事務局)

連携の中には、市内の観光関係者間の連携というものも含まれている。

差別化については、例えば、観光アンケートの中で函館を選んだ理由をバロメーターとして他地域への優位点を確認することで、ブランド化するといったことにも繋がっていく。

(田中委員)

函館には北海道国際交流センターやボランティア団体など、国際観光に対応する民間組織もある。こうした組織間の人間的な繋がりが蓄積されてきている。

また、我々が目にしている統計資料などの各種データは、然るべきところに蓄積されて、公開されるべきだ。

このような難しい話題は、研究としても成立する。函館には観光系の大学がないが、研究組織を持ち、データの蓄積や新しい政策の提案を行うということも大事。

(木村委員長)

そうした機関での成果を活用・参照するのが本来の姿である。函館では市役所がやってきたが、それを担うのが教育機関なのか、行政なのか、という議論はある。

■ 委員長総括

(木村委員長)

まだまだ議論が足りない部分はあるが、時間となったので、本日はここまでとしたい。また別の機会を設けて、改めて目標設定および施策展開について引き続き議論したい。

■ 閉 会